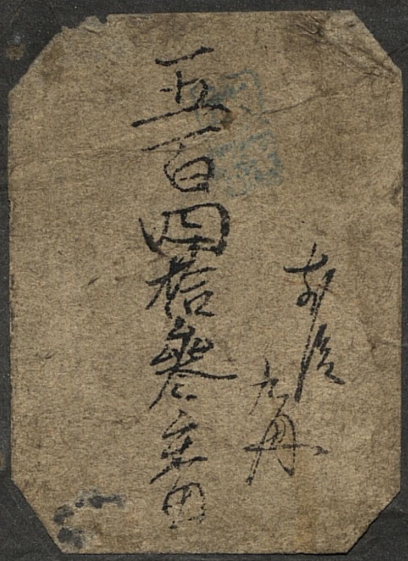
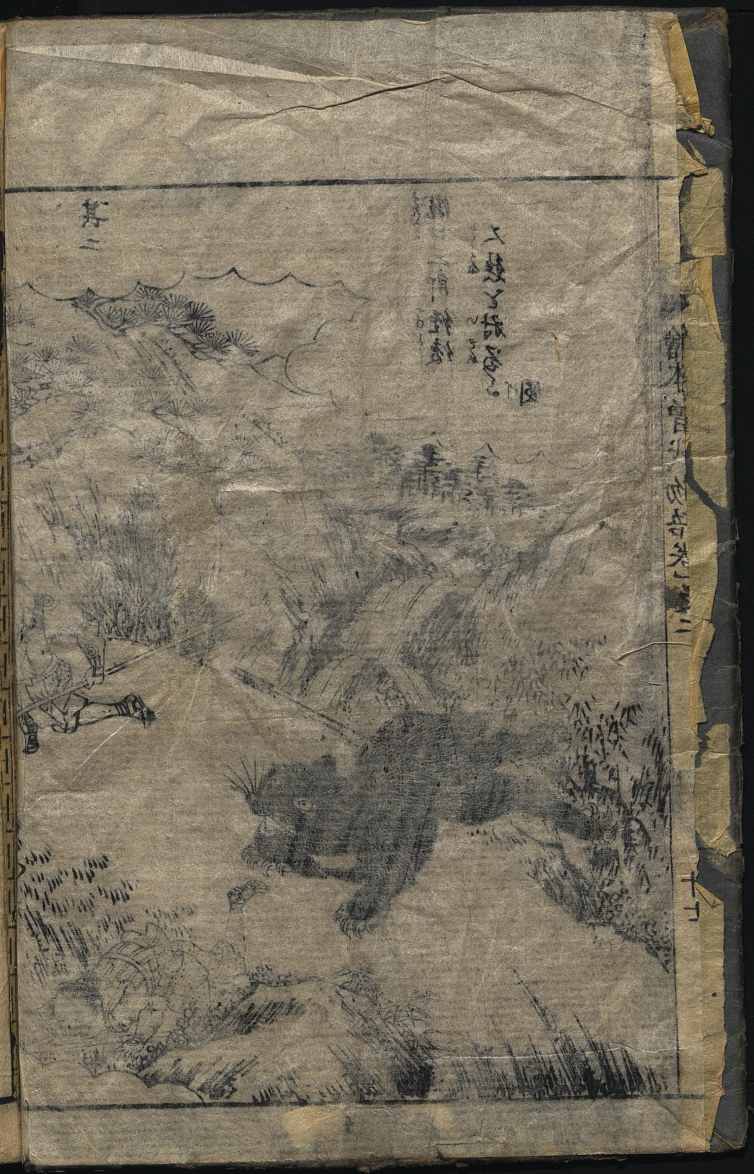
夢想兵衛胡蝶物語前編

壹



其二

PAGE(S)
MISSING



胡蝶物語自叙

明治

懊惱たる物思ひ凝てゆふべの夢となり姿亦覺てゆく所をしらず夫夢の形貌の影なるを亦心神の労なるを人目を閉て日を背けそのかまへ亦あり。志のれざるその新をえざるあいまゐの思ひ

高き昔荘子夢に胡蝶となりて栩々然として胡蝶也ぞこの意を得て荘子たるべ

さらぬ俄然として覺るに及ぶ蘧然として
莊子也莊子が夢か胡蝶となる歟胡蝶の夢か
莊子となる歟是れ後なる歟是れ物の變化彊
なる浮世を恰大夢に似たり善悪は莊子と胡
蝶の如し善なる我か我なる悪の悪なる歟か
我なる是れ後なる歟疑へ聾盲の夢か形を見
ず聲者の夢に聲を聞ず苦を知ざるが如
し悪をなすも我なり眼のまざえざる
ところ心のまどはざる所孰か是れをゆめみん性の
善なる化して悪となり性の悪なる化して善となる皆
是れ心の起す所新の形に從て異なるを夢なれや爰
あれや是れそのゆくところを知らん。

文化六年己巳六月　曲亭主人識

少　赤　鳶

羊　獅　蝟

四　蚊　虫

色　裙　蛇

然　大　木

鬧　魅　鼻

少年鬧るその遠近ひく黒とのふをちらず
屬者おゝそ四ッ水ゑ側とのひ不教
とのひさいそぢ傷とのひ孝行傷とのふ
ねんとく

この四ゑ赤鳶とのふるのりちいぐさのとく
ぐいあとけのとく黒い炎じゑ似けとるたら獅
まいにちとこちのちるみとく蚊虫ゑのふの虫たふやう

ちんとく四ゑちゑ裙ゑ蛇ゑ
二十ゑのゑ形ゑきりとれバそれとも
とそちり地ゑその形ちゑてまるくゑ如ゑ
ちんとく

また竹とのふ竹ありこの竹
又あくちゑのちる魅とのふ魚ありそのりち鼻を
あいちそゑがむとく又ちゑ魅ありとちる
あくば命をうゑのふ孝るべつゑむとく

强
跡
蛮
飲
青
津
桐
國
具
伊
蛮
貪
阿
太
次
計
梨
禁
慾
促
織
國
止
脇
鵬
慾
どんらん
どんらん
一名
瓜長蛸

夢想兵衛胡蝶物語卷之一

東都　曲亭馬琴戲編

發端

人生五十年。七十八古来稀なり。彊める生を天地に稟て限ある慾を火宅に耽らし。九六の百に繫まる。一文錢に生命を剥し。三品九輩に火面を張て利を射る音。熱閻場の土弓より暴く。鄙前の大どりめひやらくいに就て泣つ。備はるとは地藏尊も。王を抱けばかるゝと罪あり。況や迂闊の凡夫。閻魔の口へ抹香嘗ても腹の足まうゝと。地獄の制度も金次第とかや。

ちうはるる金言あるめるぞかし。他の物と名はくまゝ。金錢ぞ長堤苗ちゞ。一夜酒屋の張人のごとく。入れ物の出納めり。陶朱が貯あを救ふ。

るゝ。石崇が富も一期に有がゝ。されば飲食に命を繫く輩あり。肚餓しと

まぐい物いう。東海の鰡條。西山の鳳脯とハ。毛唐人の食ぶべき。小到で買
化初鰹くらくも。腹ハ街道茶漬くらくも。喝採三才を通るくちぐるこそこ
しと後ハ菌形ハ積出てハ。大夫とつぶやの艶書殻同抵。それがそれぶみの
直うらもうしをそんバ室庫ハ。膝を容くまぞのいれものみく。姫皇の
阿房も。原憲が蝸廬も。宮も藁屋も。都も鄙も。廣いと陝とゆくるぐりし見
腦伸ーと寝る処ゞ。席薦一疊の外ハ出されどさて亦衣裳ハ五尺の體を。
裹ぐるく假の身の皮蜀江の錦も。敝る細袍も。美しいとたゝまれたとふ
ぐるぐる。元ぐるぐるまハ赤裸宗面院の土とうりゝぐれが美服縑くと人ゝ。
スて羨むものもう。紗綾縮緬でも。犢鼻褌ハ犢鼻褌。ほろ二ゆるほう堅
まいでも。麻上下ハ麻上下。この道理を合点されバ。肩と膝くるる色紙めて。
る帷子着ても。二伏の暑ハ暑ハ。汗暑ぬへもあり。二両くらゝ。二重紙子の帯

ちめても。白日青天ゝ。ゑ拭被つくあく女もあり。外だるとうるハ衣服の
美悪ゝ。ゑ拭ハあくぐ。商人のゝ衣着ゝ。ゝとゝ。古今の序者のるはるゝ
ぐや。風雅でもるく洒落でもるく。あるまゝるてゝるく驕まぐるいるせる物義ゝ
ちて。高れものゝちりるぐ。宛ハなくれど二李ぐぐひとゝものをとり沒ゝ借小
袖流行模板の人ぐよめたちんとゝまくと一ッまゝ二ッぶう襲後で被て出
さ不ゞくゝや褄前ハ質屋の庫へ向てあるもいとくるゝ畢竟衣服ハ貴殘
をるくちぐ。礼儀を整る彩色るれバ。蔽れうとも襪を引ゝ。靖たてもお太
刀とゝ紀。痩身代でも借倒さぐ。天ゝ授つるたけの業と勢めて。暇あるとう
とりハ青表紙の端を開紀。昔の人の風流をスく。今ゝぶ態とるゝさんゝ。
金りつく苦とるまハすんべ。天道必盈る成缺く。金があれバもづる子がゝ。
子が多くれバ。殘がゝ。美人ゝ馬鹿あり。驅郎ゝ才子あり。氣の利ゝ。浮気ゝ

く。乞ひなれば意地が強し。堪忍五両と定めるに。小妻木綿が一反で。老女二四ぶ。ちさひの相場すて。密夫の扱金より。武両二分下ゑるいちとりあんぬ。ろ物ぶ。ひとりぶ。の吸物椀。十人前はへ足ら拭ども。昔堅地で四十年。並の。ろうう世残捨て。一生涯を夢と暮す。夢想兵衛とつよりのあうろう。渠ろかしそのむう。年も十六むさの図。四十七字の假名川ろう。

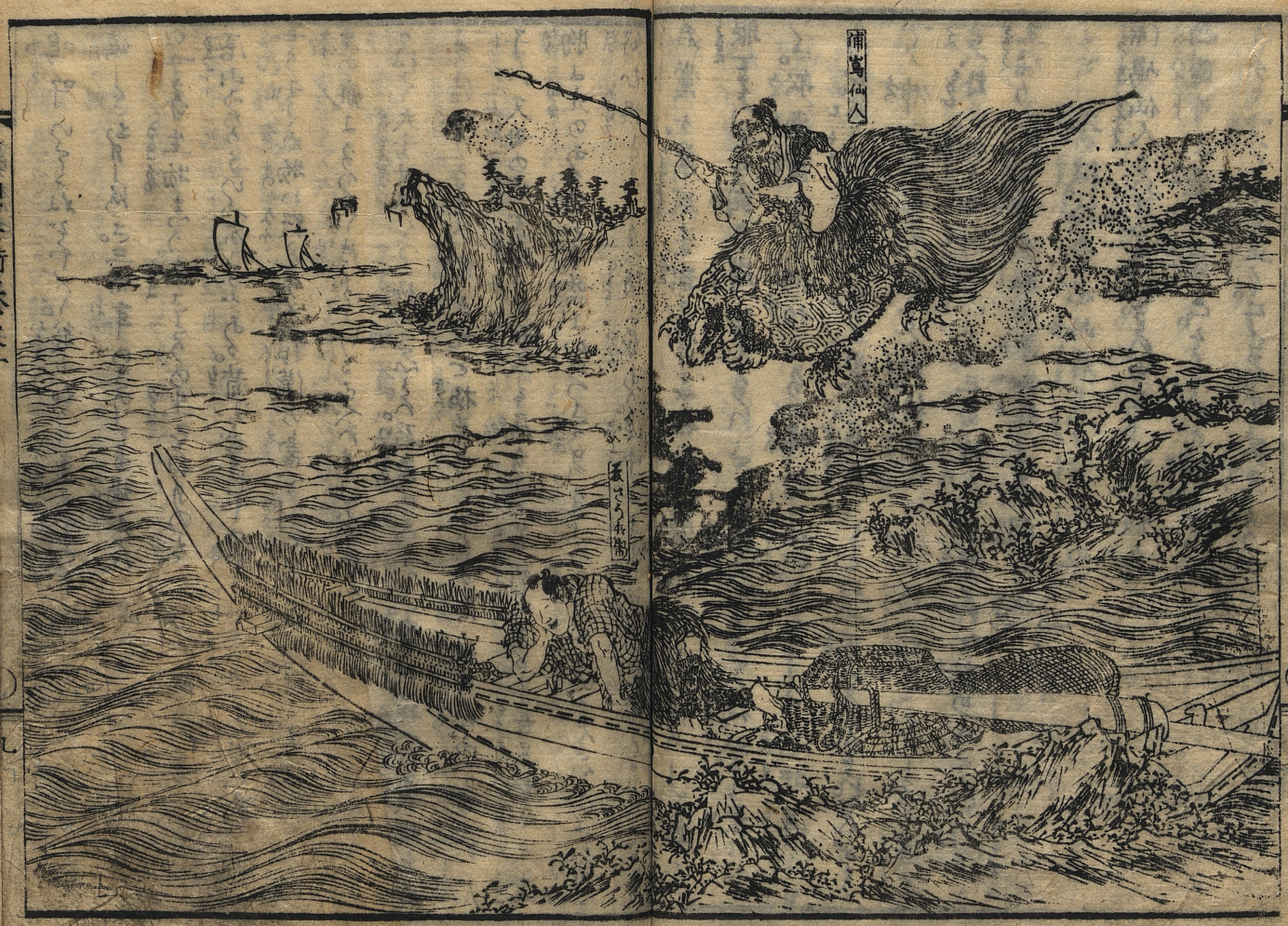
浦嶋塚のほろうは位ひて。こる敷の春秋を。むく風ろも櫓をろて。釣と網とる世を渡て。菊を東籬の下ろへ採らねど。五斗米は腰養を折めば。上えてん。乃ぬるの夏ろたと雨ぬらぬ日も笠を敬さで。心を青海原の蘆花は比べ。常は一葉を浮べて。一瓢の酒をたのし。彩は眠て紙は筆へ。その外を求ざりし。一日避谷子が著したる。和荘兵衛と云冊子をとんでそのやう。老佛道を喧うけく。ろく孤とろ。能書究く精細

るれども。馬乗は陸の業ろう。荘子がえうう上手。達磨がえ分別。おぶるるるう銚子えん悟とども。近属表えしく早嶋の席。薦へろろく酒をろぶ。顔のえうう。酌る女子の丸夫心。席薦が伏ればの會席は繁昌せど。頭が凡ねば。松魚も下司の口へ入ぶ。人間萬事塞翁が。馬乃糞で菊とつろく。鑢虫が飛ばみもあうど。和荘兵衛も狗をろもどる。暴風みもあんべうど。暴風はあんどーる。嶋めぐりもるべうど。嶋めぐりせどは。貪福窮達の理を悟べうど。貪福窮達の理を悟うど。何をあうく。和荘兵衛といへまん。画はうく。絵。綿と盛と級とえん。脾撓い腰は高ど。憂もつろんも食へてうく。葉ゑも龍をろもどは。真の龍

おそれしいるべきなり。業平も色を好だへ。真ある女の志をたらがたらん。正真の物を生ずべくして。後学まれ。ようや十方貫の詰貫腰に着ずとも。彼楊州の鶴ふ乗く。大千世界と徜徉し。人のまぢえぬ處をえび。自と誠のそしるもるべし。暴風がふけり。吹るぐさまにそっぷへ又あやみくよ。頃日の日和のようさ。風の神も風の神。龍神どのもらめんと。あくまもるの願ひと愛しと。人も本拔の神よ舩をとらめ。もしら暴風をまちはどよ。弗と気をふまぐしく。楫と櫂よりへども。ろくと目睡ひ。ろくろ。白髪なる老翁腰養と着。約羊と肩ず。公望ふへ髯がる。夷三郎みたらと巻とるが。怨後とくく舳前ふ立在。ちと起ものく。と医者どく

若黨が。茅取を組ふ。ゆく揺艇ば。夢想兵衛恍くしと。鐵壺眼をたちち開き。岸をたるれさる船。そのさい何知ぐ愛しく。船幽霊ろく柄杓がのの。通ちしたと。ちまくと挨拶耳ふも。けど。夢想兵衛の名ふめぐ。善哉くとりふ正ふんどそれでへどう。

佛ぐ。ぐちふ丹後國。水のしの釣翁ふ。えらぶも蓬業宮入。赴き。仙人の仲間入く。三百餘年の栄花を極めふらび丹後ふ立ぬりしへ。古今不双の不思議ふ。開く悔しと。玉手箱ふ忽地。老の波。於曾也此居と万葉集。長歌ふ浮名をぞめし。浦嶋仙人とふこぐふ。ふもちらねど假名川へ。ふぐ生ふ郷ぐ。西蓮寺ふ塚と築ふ。そのこと隣どちふれへ。そふふ情愚ふと。ふりぐら。吹くも矣止く。ちまぐ来ふへ年ふの真実ぐふ。ふふふふれみ


浦嶋仙人
蓑さろ衆衛

嗚呼いとゝぬどやく。翁もゝ亀よ寿ゝく。蓬莱宮へ参ゝとゝた。嬉しさもゝ孫さ。三百年のゝ〻ゝ竭ゝ八一日の悲しゝゝ経しゝゝ。のゝゝ生物ゝく。生ゝゝの生ゝねゝのゝ。れのゝ猿智恵ゝ剣ゝ。唐山ゝゝゝゝ方ゝのハある。昔ゝゝゝゝのゝゝゝゝ

郷とのひ。煩悩郷といひ。食言郷といひ。歌楽郷といひ。あのく。風に隨て。到らんと自在こ。努く疑ふるなれと。ふと手くび取て滅て。絵竿のうへで遺うる

少年國

夢想兵衛が浦島が授る釣竿をとりて。こを削りて骨とし。大きなる紙老鴉を張りて。ちと細くこと教へ住て。釣の糸紙つけれバ。その具合そのまゝ。章魚といへて。烏賊といへて。釣綸に縁もあり。牛と放子に形ひろ。鼻を通ことといへ。縁より是ど。こを仙人のりて。高く気にのり。忽地雲に乗が来て。こを假名川の墨よりち出し。糸の末を杭に結とめ。その糸に紙鳶の背に書つけ。風のりてゆくを釣杭ら。東風をよくと吹ちふ。不思議中その紙鳶。夢想兵衛と糸せく。

空中に閃き升り。雲を霞ものを殺よ。そのめに短く見糸の。陷を遠ら延て。ちよう長くなりて。富士山の頂上とさしむかふまでよりう。夢想兵衛を。そのめこそ。藩主と云て。一ぬ不孔に考て暮ても居て。その紙鳶ちゑと佳く動るねバ危きを到て。ちゑ巳いとも安ぞ。板三寸下に。地獄とまりるがら。海松蟲て。世をとるものもあり。梢五六丈上ら落ちべ命をかけ。えがあつても。それ限じやと考るがら。枝とまりて樵夫もあれど外ら陷むやうあれど。物ハ心のうち汚れ。貧乏も貧乏漢ども。備後乞が苦よ。ゆくね道理ぎや。と早合点く。そゝ〳〵溜等ゝひゝがら。下界遥よ直ちせば。こゝで名を知少年國。郡ハ何といふ。ゝ考ねど。水子浦と。くてこの処の人物を。悉く稚児ゆく。その好景繪を画き。小人島を異すらぐ。亦彼塞の河原を似ゝ。それがいとゝ浦りの。ゝぐまもく化生ゆて。

天地陰陽の氣を包まれ。風の日く。ぐつと生て出る。身の丈僅
か二尺五寸ばかり。男か女か。髪をそろへて。坊の髪へ一括りの毛を殘し。
額門。ひくくと動きて。天窗の柔なるを。搗くその解のごく。手も利き足
もなるハ拙ば立ても。寄辺なもなりのもあり。男子ハ桃を垢に浅黄
を垢。女子ハ桃色を垢に白を垢。いづれも鶴亀松竹の大きなる紋と金
銀泥あて摺こなるを。晴小袖として。副紐の外に帯を結び。額に
ほうれい綿を載き。紙をるぐるを。味醂酒の樽の漏るぐ。諸蟲の
模様ぢ。猪猴ハあるがら。三度の食も。乳汁ばかりでハ飽ず。大小仮を
居るぐるれて。衣裳の濡樣を成厭ハ。浴に入ると成裏嫌らひて月
額を癖さ時に剃らせ人の物。ぐ塚の差別なく。なる物毎に不ーぐりて。
やうねばぐるぐ溜で。ぐうり。金より高ーへ入れて。黄のるれ

もあり。大くるものをぐりのいも紙言ゑれば。推量しても図とりがたく。
火の燒を志ぐ。刃の疵き成志ぐ。昼寝して。夜ハ寝ず。枕ハ真ー
赤小豆を入れ。蚋ハ母衣蚋を翻宝ぐり。蝨ハ母衣蚋を翻宝ぐり。肚餓れば泣。肚餓れば泣。
暗れば泣。ぐぬ人を見れば泣。外へ抱て出ばるく。その泣と見る咒
あり。乳首さへ含まれば。忽地泣ぐを妙なり。そのうるさ。ぐさ。
強ていへ。ぐもるけれど。天道ハ人を殺さぐ。この水子村ハ恩愛といふ
二柱の神をりまして。男神を愛く命と稱へ。女神を奴く命と稱へ。
お乳母。奴隷。伽底後抱ぐり。里親小児医者の神ぐるる至るまで。神
あつめる集めまひて。ぐるべき由緒の家へハお乳母奴隷。伽底後の神
を遣ー。中人の処へハ。抱守里馭の神とぐるハ。ぐのぐくの処へハ。ぐぐ分
身して影向あり。神養ひる類ひ。神育る育ぐ。その慈愛の深

王。硯の海を掬るも。筆あり書も尽さべくべく。日は曝を小蒲團を。
虱生き湯気立て。膚を焦る海蘊のぞくろんどもこれを臭しとまゐ
ぞ。雨は恨むまゐ。鹽水のるる鶏卵のるるくは異るくねども。これを
禄しとまゐぞ。懐の中。膝のくは尿をされても。腹をくちゐぞ可笑も
ゐいるる。げく笑ひ。寝るとれるねんころと唄ひも。手を枕て胸を敲。足
を揚て。腮を踏ふり。髪をむまくり。乳房は歯秋をつるる至て。腟痛む
とあるとも。その紅れを咎めゐぞ。虎子を枕として夜をあひ。鄰ある
そうて日をくひ。やくくは森せけて。女嬉しやこちの間もるく。かーの
音は駿くく。火のたくやくは蹄出くれ。結びけは髪を握ふ。食けは
茶漬の香の物を吐ぴ。周公旦が吉ぐりゐふとをふ。りそうと遠く
まり迎へく抱き起し。まりけるるいるもせどる。ひざれ腹も徒くぞ。

安閑こゐのゐ。ゐるは。案ころんむゐるおまろくさ。よや国の三つある年。
十三月めぐ生まる人でる。斯光を長くりるく物うはさそ暇ゐるをくゐ。
る打くとうてゐるとうさせ。そのゐくといってゐ学をつるを。天窗てゐく。
けぐりく。さゐぐの藝をまろけ。こちぐざれゐ醴と麋夷を定め。轉ぶを剛
いと誉め。位をとん子と誉め。さといくが魚貝を食せ些の物を越へる。
てんと青と臭を拝させ。めゐまんまといひ。羹をまろけといひ。ゐハせのとさの
いひ。大便をうんこといひ。小便をまくといひ。神仏をのんるうといひ。花をへる物を
ゐうゐとつひ。恐ぐきりの沢いやく。てゐうとつひ。まゐをゐんとといひ。立をこちち
とつひ。薬をねんゐとつひ。稚児をゐ又ねん後といひ。潔き物をぐぐといひ。うと
ぐぐうとつひ。犬をうくくといひ。猫をゐゐくくといひ。鼠をちうくといひ。魚鳥
をそといひ。茶をちやくくといひ。酒をゐそ。又ゐうとゐいひ。ゐ沢てくといひ。

をあんようといひ。衣裳をぞといひ。草履をぞようといひ。ぞべて男子を坊
ちゃん。外國と言結のちゃうすとてようようぞとりく腮を賞でけく笑せ。
坊ハ雛が子ぞと同ようもあり。拾ぶよ麋美をさうちるるハ。この外ようの外
ようの。大約この鄉の時疫。疱瘡と麻疹と。百日咳。この除。五瘧
驚風。胎毒ホあり。いづれも似る症なれど。茱剤を嫌つく。雷ぞうわ
飲ぞ。熱のあるぞよ。脅惠づんく。朝うち晩まで抱きくわうぐ。いづが盃
ぞ。正月ぞ。飯ようの外よ。慾もなく。三年ようく懷をえれ。五年
みくとうく走り。七年みくと。寒暑をきる。當家ようと七家までを一期と
きそいづまもひとりもながるるねば。恩愛二柱の神のすぐせのようとば
きそ。一日も佶ぐけまどかる。知ハ。天道別して油斷なく。かくのごく
[illegible]ぞ。眼ぐるけまど。小鰕が粘てゆく。物とえ

れば。水田もえるぞようおうえ。瑣珞といふものハ腹がゆりまど。小蟹が
粘てゆく。物を食へば。瑣珞もえるぞよ。覚え損よ足がゆりまべ。狼が載て
ゆる。筆ぞ算ぞ亭主ハ。算筆のゆく女房ゆく。目盲よ杖。坐行よ
車ぞく。世の中ハ肱相りち。天道ぞ缺るを補ひ。又盈るを缺が商賣ぞ。
息ハ公道の及ぶ。ホゆく。又の誠。愛ぞ人情の赴く所ゆく。母の戒ゆまべ。
恩を稟て恩をまぐるものハ。禽獸よ等しく。愛よ霸まく。こまと教言ぐるも。
又禽獸よ美ゆくど。と夢想兵衛ハ忽地曉て。世ようの親が慕しく。
存命てぐるとれよ。孝行らくもちゆんぐ。冥加ゆんぞ。悔しゆぞ。面目
ゆうぐ紙拭ふ隙よ。紙鳶の糸ようくと伸く。鄰嶋へとのとわぐよ。ゆも
ちくりゆ年國のうく。ゆれと。善と悪との潮堰。天矢樫の骨張。難不敬
ゆうゆ。石の榜示よちまとう。さてこの知よ生ゆるもの爲体をゆうよ八

衆より十五六歳を一期とす。衣服を肩と腰とを縫ひあげの字袋より迷子札を著るもあり。頭髪を小判形より頂顱の真中を剃て四方髪を長くし四ツ辻の結の靖蛉髪もあり。芙子坊主もあれど月代を剃髪をもあり。上を嫌ふ方多くはざんぎり髪ふく。天窗ふの白雲とする引鼻より水桂のあるもあり。弱虫は強虫より征せられて。これを餓鬼大将と仰ぐ。樹より攀る猿猴のごく。水を越ぐる河童のごく。草より隠れとる鬼のごく。俗なる虫鳥より似よう。衣裳より襤褸を厭ど。肢體より生痍を厭ど。犬とけうけて。棒をもつて。嵐を愛して。路を鳴さ。春は紙鳶より飯時を忘まく。鄰の梅花とちし。夏は蟬を捕ど。蝙蝠とうたかて。蚊盈の猩生を撃て。秋は野ごゑより蜻蛉を逐ひ。冬は背門より氷を砕き。雪紙團めて蛍を集れどもこれを燈より書と積とをこのまどいの勢とする。朝の五より。

昼の八ツまで机より。筆をとれども。一畫一点ようも習はど。人形の首もろくに飽まど。草紙べ水をうけく。勘定をあつ。些もせぬ小便ようびく立て。傍車の草履をかく。ものくもあい厠へろく。掃溜の桃の樹より云をうけ。大小便の番札もその敷つくてせんとするけまば。筆を舐ると。後翠をつけるごと。手を塗面を塗るエ。草紙より黒く。湯を袖でうと。土間は敷足であるくに人の前へ出ぬ。指を銜え。後巡して。袋を被つる猫のごと。ことくろ弱虫を罵るとて。膝をたくあて。屠呑剃刀のごと。戎い好まて。ぬるくく踏くく。雪踏の伝くを厭ど。戎を障子を破る。行燈より穴をあけ。壁をあせうて。土を食ひ。持仏を捜して。線香を食ふのあるその罪殺しがけまべ。師匠尊者。己ひと紙ばかりど。机よのごせ。茶碗より水を入まくりとるかそ。ことくに恥をとるど。灸をとるとろくとる。四鄰を動して。身の為をろくべ。

此地の國法は罪あるく答うとて。ぬぎ脱きまぶ。ふたび責ど。或は鬢と
つあり。或は背と打よ。痍のうぬやうよる有さの之痛ど。細引をそうと縛り。押
入戸棚へ入まそおくと。刑罰の第一とて。ちくは昼の灯燈よ火をかり。女を
見せく懲ものをみる是天矢槌の開闢より。今よ至るく。この如を管領し
ぬ。両親尊者慈愛の紀法るれは至てゆるさ仏國あり。ことのく
下賤の男女。その法を怖ものが恐よ有る有よ。両親尊者へ孝
苦勞とうけ。冥罰殺よ脱まぶて。身のあれどころうくるゆあり。その中
よ。鼻の下の長きものあり。これの長きものあり。鼻の下
の長きは生涯そうこれの長きは貪り。手の長きは盗む。れ
ども。両親尊者これとをこ。ぶとをそもうとおもひて。人よ対して彼
を恭むり人あって彼と琴るとは目を細くし。鼻をひろせ。歌びりこと大
くこうとと。賞罰正しくざる有よ食物と尤くへどりつれ。動ものをべつ
食て。桃柿。梨子蒲萄。酢瓜西瓜。蜜柑九年母と食て。餓る猿のごく。
唐茄子さうを暑で最上の珍味として。饅頭羊羹ぶりそうん。焼大こうと
の類。ぶて甘れを嗜そ。酒と煙艸をのむは稀。年中よ只一度。正月の松乃
内よ。麻上下と引ひけく大きる名をれ門ことまるねどうちとろめしけまど。
ゆりあは。上下是るすくと貴まどり。二月初午の稲荷祭あ。さりのつはる猫
のごく。飲とをく食ふ二月も三日も乳よ飲ど。五月は門よ幟を立て。菖蒲
力をひけし。幟杭よぶくどり。幟竿よ洗ひのぶりて。その危さ。くるめ。膽と
冷さ。十二月八日の吹草祭よ。一番年おとろがけ。兄弟牆よ鬩ども。鴛原の
誠とそはどり盟よるとれは大誓文とて。釈の頭よ松を竿と唱へり。
打いるもるとのれば。ちんあいくどのれ宝と唱呪あり。三宗より髪をあれ戎

すして綾羅を衣、女子は七宝を纓を解を驕奢のためとて祭の練物よりて生涯の面目とそふるのみ。耳目を驚ましめども、夢想兵衛は再び悟て、そもそも小膝を礙と打て子を艱と教ざるは父の過なり。訓導するの嚴なるは、師の情なり。又教師嚴なれども、学問の成ざるは子の罪なり。と司馬温公がひくもとなり。夫父子は一體分身なり。又これを教ざるは子を愛せざるなり。子は志あるといへども、その父母より教ざるは子を棄るなり。不幸にして甚しきは、その不教嶋の秋勢を見ては、絶まで食はせ暖かに衣せ、一挙一動を教るのみ。親を嚴として賞罰正しからざる故、その志を惰りいつくの人、その子を遠ざるとて勢ひ行きがたければ、これを責ること甚しけれども、終に愛を失はんとの故なり。必ず師とえらばんは師の恩は父母の亞なり。されて癖児は物をもてその教りをも捨ぶいまへ二分の十金を定む。今は数百字を習ひ、五節供銭の二百文を過るの類、どうり文字の相場。うどくつそよりは直あるべし。世は筆文盲の変きん。やく賣りやく買ふ。文字の相場よりあるべしなれば、学習すること三年よりこのかた、假名手本の二三本もあるべし。物の用ようとおぼえ貧之人のまよふ。いとはいぬるのみと。師匠とをりいて年季奉公出しまかりて家を拵んであるべきあるべし。年中二度の宿りを待て使で出ることなく、親里へ出よ。檀那より迎ひよ。桃丁りつくもくといつて親里へ出れば、両親とうくと吠とるじて嬉しがり、おごり暮るあいだ、飯を食てあけ。好る唐茄子煮てもすすめ。食物がるんで、内よりこれより。痩さ、ゆ。と負苦労がさてゆる。油除と黄楊の櫛をとりて、髪のおくまを撥き

拵へ申さんとて、はつきりと好く陸意へ。朋輩がいぢめるの。伴助が毎日天窗を
くりはせるの。内義が大根の皮をむかせるの。檀那どのが水を汲とのはちがうと。
水を汲へとされが井戸端で。滕助を揚ろうさを。痛ろうとはいはぬで。役
ようぢと呵くりが。ゴーや。術なのゆえ。このころは。三度の食が。細うろうと。
ありもせぬとあるやうか。あるべそたるよのえ。ちくく。使が員苦労も。堪へ
ろ給を注出。ちいさんはかく頭痛めらにやよ。毎日天窗を敲きて。洞仁ゑ
ぢもるぢえぶあるぢ十一や十二の小脇よ。水を汲せる檀那どのも檀那どの。自分
の子の可愛をちつとも思はぬ。大根の皮は大人でも。寒いはあるが
ちくく。むれみんりのであるよ。指が落ちぢさるる。店のくりはさせもせど。
竈中へさるるは。紛米の外侍。揚ちくん痛むのじや。白龍香つけてあ。
その滕助ちく出。と湯屋の二階で居相撲をつとらもろ手とはまくどど
まく。棒ぢどよ。ゆく。針箱の引出。捜そろ出。膏薬の貝がらもつれるがら
ぶぢろうちど。今まもうく幸防くこんな。ゆるるあの及ばぬ。ちくくけまろと
やじやまと。注とられと親又もぢうやう。ちくもるん先よまつて。賣俗ちよろ
まち。買食ひまるとはまとでも。年をろくろうの得らはると。面倒とまる主よこま
こまとく。ろうろくるさ処が。世間がある。べ拵せもまれど。夏桃でもうそへろ。
買出はまとが。ちとる。そちの賣る物ばどう。本銭さへ滅さねばやうけさ行ば
こちくはそうぬ。買ちるの代買へとふ。それくくちくくくとるちくよ。ぢやう
小銭をつひ。ぢやを年あはやせく。誓古ぶぢのつれあひ酒のあちうさう。
ろくくなとはるもぶぢ。後あの駄のよもも入よねば。その友ぢちと。憎もを。
讐敵のるひとうのもとの。不教嶋よ。妻くあり。又くぢふあ。はぢ。
年季二三年も勤てる業が入るとはや。拵条と出けて。柄杓一年よ

五十三驛と股よりけ。明て暮てもとうんりのるく。乞食を三日とれば。忘
られぬとゆへ。猿よりれも。れうう勤がいまようの。のうらくりのふるもあまど。
神の導給ふとく。その度い免さんても。残る七年を勤果るへ耕るり。蹴る
馬も。足よ隙があんべとそ。人とも蹴るうん。上手が乗まべ。あちこへ。ぐらし。
こちらくうぢ。些も足とうあまをねゆ。蹴るとるべ。こちの馬もかの
ちく。ものかうう。讀書算筆。文学武藝。子の母どくよつけて。手のこくうけ
毎日ちうく。これを習せいとまるとれい。腰えへ。つけて。茶を汲せ。こちら
を教ゆまべ。朝うう。晩ゆでこちの馬よ隙があいゆを。うん。道へい。踏ゆまいね
りのぐ。これをとく。庭子うんとん。その釈とまく。意ゆて。子どもゆ物を学ん
とちゆも。主ゆる人。その使ひ易を便利とー。僅ゆる給銀こして。雑幼とれ
うくこれ。つひ。昼夜暇かあのゆを。絵よ物習へうかうくど。習せてゆる。

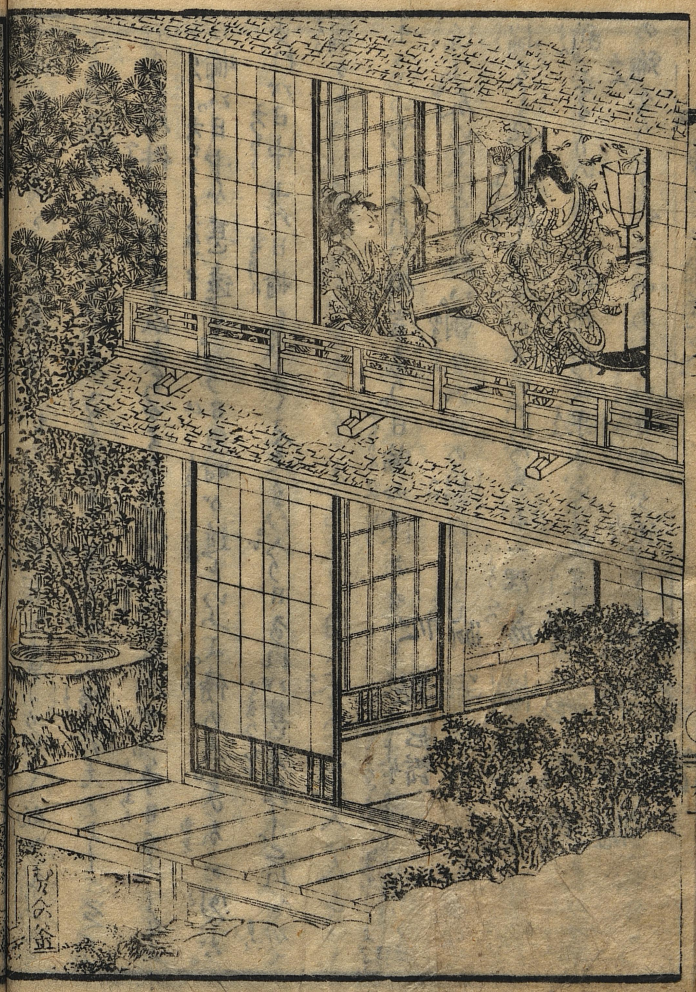
ゆるゆ。雑ゆりのくうひあれば奉ゆを。嘉よけく。親のいへとをよくも。業
ど。天晴ゆ筆。文盲よとそあげまても。庭子よやとく人もゆ。肩で
引ゆをこりの。ゆこりの。ゆこりの時い役よこど。新糸よこくまへさん。歯を切
てもせんこ。主人ゆ。今ハうとゆーぐ。雑幼とれうう。扶持しても。そく
役よこねゆ。と。と。と

はぐるよ。食ぶのを。衣服御并に金銀を費さ。物ぬんとべ。糖袋乃截縫も。ぶりとるけまど。恥しいとも思ハど。手習よりくと思よりけく。草紙い儒さまくよ投出て。母親よ乾さセ。三絃ひくを。第一の藝ゆく。鄰の病人よ遠慮せど。これくよ終よ。浮氣よるく。三絃の駒と共よ。そろの珍が狂ひ出あ。見道へと引まつ。浮名を人よくくもあり。むく子とるよ。るぞくとけてゞゼとくハ。そのあのとくまんゆるく。ふむすあよあ中をそくとるハ。織物よ坊るくんゆるく。又貝あハせ。歌骨牌。ぐりて目つけ。繪るどいふ。拍びをさとるあ。眼力をくまんゆるれど。この嶋おそい古風ありとく。こまくの拍びをせど。羽子をつ死めくし。鬼ごとるどくべて。気がさゆる。拍びをのこして男子を。男子嗅ひとも思ハど。髮の結ゆ。衣服の模様。流行をおねてそづくく。撰ぶとゆちくで。三絃習へが。こちくでも習へ。おちくで舞踊を習へバ。こちくでもるくひ。

まぐて人まねをのとるゆゑ。常よ鄰の財とりぐくて。煩悩の絶る隙なし。二月ハ節供ゆくくり人形を。若あらひくく。先祖の遠忌を吊ふくり。銭と費せど。これい天児の餘没ゆく。ゆを拔て。河へ流し。邪鬼を禳ひ。例とゆくど。女子の世帶とゆめくく。薪炭のゆ乃をゆくくいをる乃くと。いふそく。ともよ。吹ゆまど。驕を者さ。倹を守りてそのくの為ゆもくめ。子年の物よ。待羅と。儲ア。三四日の眼をしの年。葛籠の中へ。ゆめまくハ。何の乃よゆもくくかんくりくとも。紙雛よ。櫻の枝よ。こと。あくんこそ。ゆまゆもけどくく。どくくのれ。その鬼よ。あくでこれとゆくくく

又築山泉水などハ四方僅に二三尺よりなし。鳥賊の甲ハ化して鶯と
なる。石亀つくりあげらるゝ。個げともなひ来る。金魚を盥に放され小
鳥ハ窓に啼。松虫鈴虫なりくゝ。時に隨て養ざるをなく。井戸へ貧
乞ハ伏せく側に。田地ハ一土器を一反と定めく。農夫鍬を肩に
て立ども畔さゝず。弘の天神を祭る。儀式歌を早く覚え佑賞に則保
あり。屋敷店に借あり。かゝる費を半者てのよく学ぶ。ゝんあ十人
の師をなるとも二季の東備ハ自在なんと。夢想兵衛ハ考よ
まるやうな。小言に隙に糸ハまくと伸て。亦郷の嶋を直ちなべこの地の
男女ハ年よりまさく。いづれもくまくらしく。嗚呼がくくも小ざくし。
方便ばかりまとまる。さんば不教為に品なり。ちと逝そなるなれど。
遠慮もなく會釋もなく。そ出口を利なり。理屈に仇なる不理屈に

て。両親なる者をなりこめなり。ものゝ猿利根を鼻にかけく。物を習ひても
未まだ出げるといふ。手なるよりも。僕が来ゝ。横ぢえをよりとなり。
なりくし件のいざくんとなりあて一人がいふ。毎日くくしのゝ
日輪ハ日中が甚遠く。入る日の時が近といふ。傍の人その方と同ぜ。
されば日中ハ日輪ちひさくえ。入る日ハ甚大くしそれを知て
揃るとくしハ。遠いちひさくとなりと。なるなる母に答へまゝ。又一人なるく
出なく。いやくそれハ僻言なり。日輪出没ハ甚遠く日中ハ却
近く。なるいふとなれハ。朝夕ハ日の影ぬく。日中ハ酷熱しそれをかつて
揃るくしハ日中ゲ近いといふ。いづれも一理屈なるとなれば是非の判
断なるものなく。この論終に果さゞるく。年久くなるといふ。是益
の論なり。よく日のめぐる如日中が近くとも。朝夕がちくとも。日カ



ほうよりのくとるゝよりぬ人間がゝ思ふ推量して。ゝが眼力の及ぶ
ゝけをいがかる理屈いひぐちるべし。ゝべく人とあらそはで叶ハ
ぬゝい。一処無命の地を。ゝるく横領ゝるゝ時欲。身よりおぼえる紀。
不忠。不孝。不義の名を負せゝるゝと紀欲。ゝれゝの外ゝ平生の
誹。我意をゝんとゝるゆゑよ。戯言も実ゝすよりゝれ彼ゝぶよ
あゝくゝるゝく。長く怨を締ぶよ至る。かゝるゝハ。少年間よ限ゝ。
外ゝの嶋ゝもあゝべし。ゝれてゝの地の人物ハ。堪忍といふゝをゝゝぬ流
物よゝく情がゝるゝ。親むゝとゝりゝハ。疎くゝるゝ。何の怨もあいりのゝ。
天窓をゝちゝんとゝんゝく。逃。曲跪よ埋伏ゝゝ。ゝうゝとい人て人を驚
ゝゝけるゝく。礫をゝちゝる物ゝよゝ是をゝねて。賤い而紀ゝゝど小
器用よゝれゝど。孟母ゝゝけゝが店ゝゝるゝのもゝゝど。かゝる嗚ゝも。

蓬よゝゝる麻のゝく。才覆の夫嶋よ孝紀ゝ。ゝ瘦地ゝゝ。竈
僅よゝ五行よゝゝれゝども。ゝの嶋の男女い両紀ゝる者をゝる敬ゝゝ。
牙の為をゝハゝ。或ゝ雪の中よ筆を堀ゝ。ゝをゝゝゝ或ハ氷の
上よ鯉を獲ゝ。ゝをゝゝゝ。両親ゝる者よ廉暑よゝるゝゝ。ゝぶ
子を生ゝゝめふゝんゝゝく。黄金を掘出ゝゝるゝのもゝゝ。ゝゝゝの
嶋の人氣柔和ゝゝ。両ゝる者の言葉よ違ハゝゝる者病ゝゝハ時
ハ。昼夜由新ゝゝく看病ゝ。或ハ今昔。四表ハ表の物ゝゝゝ待
を慰めゝゝの紙ゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝを勉めゝゝのゝゝゝゝゝハ
ゝゝゝゝゝゝゝ実情よ出ゝ。誠の至ゝるゝゝゝゝ。ゝ流よ天道ゝを
憐ゝ。ゝを恵ゝゝ。ゝゝゝゝゝ供福を形ゝゝゝゝゝゝゝ。ゝの嶋よ限ゝ
ゝ想兵衛ハゝゝゝの好景をゝゝ。坐よ感候を拭ひゝゝゝ寝よ考

と不孝は天性なり。烏の反哺も羊の跪く乳を吸ふも。雁の長かの列を乱さぬも誰教るとなく。ぎるよおのづから。かくのごとく。その例をあるとりて推るに。鞠は反哺をもつて。家を跪て乳を吸ど。息を長かの列をもつて世を孝行する子をいふ。老楽を絶をるは善種を蒔く報の善報。不孝なる子をいふ。悪種を蒔く報の悪報。豆を執まば豆が生。栗を執まば栗が生。善を積ば善人なる子孫が出来。悪を積ば悪人なる子孫が出来るなり。己より出て己より返るものなれば。その間の作りぬる。国王の不徳。その家のなさずしぬる。主人の不徳。その子の教なる。親の不徳。その身の容らるまじきは。己が不徳なれば。人を恨ずして愚癡の至り。子は孝を教ど。おのづから。その不孝を責るものを。耕さずして。転ずるごとく。稲が登らぬなり。

田地を買るとなり。子をもつて。気のつまるものは。朝もまだ。起夜もまだ。暑中は肌ぬる。寒の日は炬燵へ。深まるに。胡坐して。飯食ど。斎をすんでもなり。假初の虚言つくど。理非を明か。快断を速か。賞罰を正くせねば。家内のものを。伏せど。腹のうちよりの。叱りでものの。口さがなく。叱つけ。我機嫌のよきうちは。叱べきをも。叱ぬ。悪の的をうち外して。道へ。けるなり。衣食よりも。家を。礼節なのづから。整ひて。推数に。ども。我が手をつかく。ものとなる。朝夕の機嫌。例のより外よ。我をもつて。真つ。なるをも。捕へれば。叱るもせど。叱るこもなり。されば下賤のもの。家をおさめるは。苦しんものなり。明くも暮ても。立ても。六畳の席。蕎の。よ。我子。先。森り。起りて。二升

ぢうの釜の飯五人中人の渇の汁。香の物は菜箸を用ひど。夜食は
とり賠を賦ど。草筆は束ねく。屋根うゝくたさと。草鞋はうけて物
干で乾し。ごり腹の摠雪隠は。先のくちのおろりをまちうねのゞが掘
子の二階下は半坪の店賃をふてゞ。三人くゝとゞが二人まくの夜具さう。
五人の客人。二人は腰をうけ。こゝで仁義礼智信を行くといへば。九尺店で
鎗をつくといふ。りちと生ぶんぢうとなれど。さはおくとゞ。のんゞ釈迦を
敬ふがよんちく。白屋は住で廚上下共づめはるが。礼義もあるゞ。よゝ
親子條ちうんでちうー。そも。親の気はちうちゞ。一皿の芋をしたをあくー
食くても歯のうん親あ。ちうをちくとちは孝行。衣食が足ちいでも。
金銭がうへて。妻子は偽ぎはるを見をりそば。孝も義も教らまねでゝ。
聖人は教をまちゞ。生まるがくよ紛りのるまば。鳥は反哺の孝。雁は詩讓の

礼あるやうみりのうく。大うの例みゝ。礼とゝ人りの八人のりのゝとを
ゆくべきりのろねどれゞよ教まば授業をそれを衝て主へまちを。
猿の藝づゝめづゝ。ちうゞ。背周の成王のちを。貝子國ちゝ遠き夷が。舞
鳴る雀をまわゝせうもあり。唐の玄宗の時。舞鳴る馬があり。とゝ。禽
獣でも。教るまば教くくゝ。所業ゝ子を捨育はちを。こゝが所謂不教嶋の
習俗。それば教いでも。ゝうのゝ子はよくゝるゝ。それば堯舜は聖人ゝれば。舞の
父の瞽叟を悪人又堯の子の丹朱は阿房ゝ。ををりくば。教ゝはよくねといゝ。
それをと眞の先の量簡ゝり。瞽叟が舞を憎んゞ。後妻は逆ゝさを。笠
の蓋の拵べゝるを悪もせゞ。ゞん親をちくを多。舞の孝行もあゝれる
ゝうゝゞゞ縦親が邪慳ゞをとくのゝも又親を。あくまゞあくゝるゝゝ。
又丹朱は愚ゝりとゝゝ。堯のちゝけがよけゞべを。親又が天下を舞ゝ

讓るを美しとも云べし。聊も猜むこころのなくこそ。なるべくの人あハあらじ。碁とうちの勝んとうそぶ却て負。負じとうそぶ勝理なるべ。孝行を尽さんと思ひを企及しがたくもあれど。不孝なるべしとぶりけんあるべ。是則孝なるべ。さらばやくと夢想兵衛にとはよ問ふれよ善く。点ぜわるべ。忽地風が吹ふるて。紙鳶ハ南の空へ去るべし。

○摠評

人の性は善あり悪あり。樹は香木悪木あるべ。樹の善悪ハ風土よるべ。江南の橘も江北は枳となるべ。人の吾悪ハ習よるべ。ゆえに鬼が風を吹りの。頑夫も廉に。懦夫も志を立べ。彼性善性悪の論は至て。おのく偏ところあり。譬ば二三才の小児過て井に落入とする。

りの親疎を問ず。慌忙として狀あげざるべし。こゝ其の性の善なる不。不意にあるべ。りゝ。ゝまども。人幼稚ゝ。食とるべ。蹄てゝを食んとす。物を入れば。蹄てゝを弄んとゝ。情慾の類ゝ。その性悪なるべ。成長の後は情を禁め。慾を割て。ゝいりの。ゝ新を。食ん。ものゝ。口とゝ。ゝ。ゝ。ゝ。善をゝ。人の性ハ悪なれども。教れば善なるべ。ゝ。習性ゝ。幼稚ハ。ゝ。ゝ。ゝ

稚児の親を慕へども。成長するも父母を慕ふ。孰か不孝不
至べき。親の膝の上へ乗ふさんとすれども。ちのがでるべきに成
ぬるとなり。その情慾を恋るゆゑに。親をとゞめんとして。
終に愛を父母に失ひ。天地に面目を容しがたき。道を慕ふ
ゆゑに幽晴く。親を慕ふる者に孝あり。うどとされを学ぶべし。

うどとこれをありのまゝに。

夢想兵衛胡蝶物語巻之一終